

Gide-Mauriac 往復書簡について

(VI)

中 島 公 子

前回に引続き、1928年における〈危機〉の考察を続けよう。

「人はふたりの主人に仕えることはできない。しかしふたりの主人によって引き裂かれることはありうる」⁽¹⁾「もし恩寵によって打ち破られないとしたら、情欲は死によってしか破られないであろう」⁽²⁾

このように霊肉の絶対的離反の様相を示した《*Souffrances du Chrétien* キリスト者の苦悩》は、Mの周辺にいるカトリックの友人たちに不安を与えた。Mは前述のとおりカトリック陣営の旗手として文壇に登場し、長い模索と混迷の時期を経てから、奔出するような創作力をもって小説家としての地位を確立した、いわば〈カトリック小説家〉のモデル的存在である。それが内心の葛藤にどのように対処するかは、大げさに言えば世人の注目を集めている。Jean Lacouture はそのモーリヤック伝の中で、後にパリの副司教を勤めた Mgr Pézeril の談話を引き、当時17歳だったこのカトリック少年が、《苦悩》の載った NRF を持ち歩いていて、Mが彼ら青年層の問題を彼らに代って解決するのを期待をこめて見守っていたことを書きとめているが、⁽³⁾「神か現世か」「霊か肉か」といった〈選択〉が一般的话题となり得た、今日ではちょっと想像しがたいほどの状況を、ここでは推察しなくてはなるまい。Mの去就は多大の影響力を周囲に及ぼすと予想された。

心配する友人たちのなかに、評論家 Charles Du Bos がいた。Du Bos は

Gide, NRF グループとも親しく、青春期に一時遠ざかっていたカトリシズムに、最近熱烈な復帰を果たしたところであった。M については、《*Désert de l'Amour* 愛の砂漠 1925》に深い共感を表明する書評を発表したところであり、この中で「神が感覚的生か」の方程式に強い関心を示している。M の陥っている危機を内側から理解できる立場にあり、手を差しのべるのは自分の責務だと感じた。

シャルル・デュ・ボスは一日も無駄にしてはならないことを悟った……彼は神への復帰の火のなかにいた……それは神殿に立ち戻ったポリュクトであり、そこで彼はジイドの偶像をひっくり倒そうと身構えているのだ……一方私 (M) は最低の水位まで落ちこんでいて、精神的には、これ以上下があれば死ぬよりほかなかった……⁽⁴⁾

Lacouture は Du Bos と M の出会いをちょっと皮肉めかした筆遣いで次のように伝えている：

奇妙なことにこの回心は最初、出版契約か商取引のように、レストランでの食事の形式をとった。《キリスト者の苦悩》出版後一か月余りたった11月6日のこと、シャルル・デュ・ボスとフランソワ・モーリヤックはヴィクトル・ユゴー通りのプティ・デュランで落ち合い、会談にはいるや、たちまち両者ともにこの会談をきわめて重要なものと認め合ったのである。⁽⁵⁾

、会談の内容は詳かでない。ただし結果は明らかなものであった。年が明けるとすぐに——ということは Du Bos と会って二か月ほどのあいだに——M は《*Souffrances du Chrétien* (以下《苦悩》と略す)》を修正する《*Bonheur du Chrétien* キリスト者の幸福 (以下《幸福》と略す)》を書き上げて NRF に送った。苦悩から幸福へ。一足とびの恩寵の勝利。Du Bos はのちに (1933 年) そのモーリヤック論中、

《苦悩》出版後六週間で、モーリヤックの回心は事実として達成されて
(6)
いた。

と記して〈危機〉の終焉を証言する。そしてこのモーリヤック論すなわち《フランソワ・モーリヤックとカトリック小説家の問題1933》は、以後モーリヤック研究のもっとも重要な文献の一つとなるのである。

レストランでの会食が回心をいっきよにうながすはずはないが、Du Bos との会談が《幸福》執筆の動機となり、その構想を助けたであろうことは頷ける。それなら《幸福》をもってMは《苦悩》のなかに語った何をどう修正したのであるのか。Mのなかで何がどう変わったというのだろうか。

これを語るのとは簡単なことではない。それは〈信仰〉に関することだからだ。しかしそこが幾らかでも解明されなければ、G-M 書簡にうかがわれるあの張りつめた作家意識を理解することも難しかろう。不十分であることは承知の上で、例によって簡単な解説を試みるなら、それは次のようになるのではあるまいか。

《苦悩》において、Mはキリスト教の神が肉体を無視している、肉体に何の重要性も与えない、と言った。《幸福》はこの認識が誤りであることを指摘し、次のように言う：

人は生命の創造者に向かって、肉体にその役割を認めないと抗議した。
ところが創造者が何をしたかという、抗議する者の魂と肉体とをその愛
のなかに抱きとり、ついには精神の掟と肉体の掟が一つものにすぎないと
告白させることによってこれに報いたのである。⁽⁷⁾

われは糧なり、生命なり、そう断言するときキリストは文字通り、おま
えの肉体にとって糧であり生命なのだ。⁽⁸⁾……恩寵の肉体的状態というもの
も存在するのである。⁽⁹⁾

「恩寵の肉体的状態」——これは、肉体と精神の〈妥協〉ではない。〈和解〉

でもない。キリストによる肉の[・][・][・]聖化である。霊肉の相克、その乖離、両面からの絶対的要請に悩んだMが、これを克服するために目指した方向は、一方の一方に対する優位を強調することではなかった。肉体そのものを靈魂の「宮居」と考えること、聖体パンが憩う「聖堂」として肯定し、靈魂に対すると同じ敬意をもって、その聖化を期待することであった。

同じような転換が《苦悩》の嫉みの神のイメージについてもなされている。「キリスト教の神は単に愛されることを望むのではない。ただひとり愛されることを望むのだ」と《苦悩》には記されている。だが《幸福》のなかでMは、「われわれはみずから創造したものしか愛することはできない」というヴァレリーの言に対抗する形で聖アウグスチヌスの次の言葉を引いている：

われわれは自分を創造してくださった御方をしか愛することはできない。——われわれは、自分を創造してくださった御方だけによって愛されているのだ……

あなたに向かうべく創られたため、われわれの肉体はあなたのうちに安らぎを見出すまで、落ち着きをとることもできない (*Quid fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum donec requiescat in te*)⁽¹⁰⁾

神がただひとり愛されることを望むのは、人を真に愛することのできるものは神のほかにはないからである。ひとりひとりの魂をそれぞれ復活させる力、死を言い渡された人間を愛のうちに甦らせる力——「愛よりも深く、愛のうちに実を結ぶ^{ワエルテユ}力」⁽¹¹⁾——それを有するのは復活したキリストのみであり、恩寵とはこの力の浸透——人間の目にはまったく絶望とみられる罪人の魂への浸透に他ならない。「恩寵のなかに生まれ出ずる歓び」——《幸福》の作者があえて筆をとって書き記さずにいられなかったのは、このことであった。

《苦悩》の作者は言った——「われわれは罪に汚れた肉の中に宿された」と。しかし《幸福》の作者はこのジャンセニスト臭の濃い口吻を否定してパスカルを暗示しながら、「ジャンセニストといえども《苦悩》に賛同はしないだ

(12) ろう」と自己批判する。キリスト者の生は悲しき生ではない。敬虔は慰めなき
苦しみの連続ではない。「情欲はそれよりも強力な歓びによってしか打ち破ら
れない」と《苦悩》は言ったが、《幸福》は肉に死の匂いを嗅ぎ、逸楽を興奮
剤と決めつけ、罪から魅力を取り去って、単調な、夜明けを知らぬ闇、終りな
き夜と断じている。罪から身を引き離すためには、恩寵に幼児の信頼を寄せれ
ばよい。「神の小羊とおまえの悲惨とのあいだに、神の憐れみが埋めえない深
淵は存在しない」⁽¹³⁾のである。「おまえと彼との距離に絶望してはならない。彼
はいっさいの道をつくり出す。……彼はみずからこの肉と血よりなる陋屋のな
かに足を踏み入れ、まだ穢れている食卓⁽¹⁴⁾に坐るのである。」

これは一種の信仰宣言 (Credo) というものであろう。Mは《苦悩》を否定
しはしない。だが自分自身に向かって、神に向かう無限の接近、浄化と上昇の
道を見失った傲慢を自ら責めている。中に次のような言葉があるが、これは他
を批判しているのではなく、己れをかえりみでの言葉と受け取れよう——「⁽¹⁵⁾
靈の退潮は、超自然を失った諸体系を露呈させる。知性はそのなかでただ空転す
る」。狭い稜線の上で足を滑らせかけた M はあやうく教会の柵のなかに踏みと
どまった。Du Bos が〈回心〉と名づけたのも故ないことではない。もっとも
Mはこの〈回心〉という言葉で否定しているのであるが。

レストランでの会食がただちに《幸福》を生みだしたわけではなかった。こ
こに一人の強力な指導者がいて、Du Bos は M をその人物にゆだねたのであ
る。その神父の名はJean-Pierre Altermann といい、Du Bos 自身、前年の
二月にはじめて彼と出会ってカトリシズム復帰の道をつけてもらった、いまま
その指導下にある人物であった。

先に述べたように、第一次大戦後の混乱期、バンジャマン・クレミュー流
に言えば〈不安と再建〉のこの時期、文人芸術家の多くが、とめどない価値崩
壊の不安に抗しかねて伝統的価値への復帰を求め、カトリシズムへの回心を表
明した。コクトー、コポー、ジャコブ、リヴィエール……それらの人びとはま
たゲオンの例⁽¹⁶⁾でもわかるようにGの周辺にいる人びともであった。そしてある
意味で流行のようになっていたこの〈回心現象〉には多くこの Altermann 神

父が関与している。(C Claudel が G との決裂後、Madelaine 夫人にすすめたのもこの神父と会うことだった⁽¹⁷⁾)。ロシア系ユダヤ人の家庭に生まれた Altermann は、詩を書き、絵筆もとり、美術評論家としてすでに一家をなしていたが、第一次大戦中スペインに講演旅行したときの見聞が契機となってユダヤ教からカトリックに改宗した。同じロシア系ユダヤ人の改宗者、Jacques Maritain 夫人の Raïssa が彼を導いたと言われている。1925 年、33 才で俗世を捨て、司祭職に就いた。Monsieur 街のベネディクト修道女会の指導司祭を勤めながら、その前歴と教養を生かして、文壇、芸術界の知名人がカトリシズムに接近するのを助け、回心への水先案内を一手に引受ける立場にあった。Du Bos の依頼をうけて Altermann はただちに M に近づき、黙想による自己糾明の生活指導を M に課した模様である。《幸福》の後半、朝起き出でてはミサにあずかり、修道院の一隅で一日を黙想と祈りについやす独居・沈黙の生活が描写されているが、これは M 自身の体験——場所はおそらくソレームのベネディクト会修道院——であったにちがいない。さらに終章には、奉仕の生活に明け暮れる慎ましい修道女の群れが描かれているが、これも当時 M の目に映った人びとであったろう。この世に苦悩とはただ一つ、まだ自分が聖人でないことだけだ、という Léon Bloy の言葉に象徴されるような、名もなき人びとの神への無限の接近をめざす努力は、M にきわめて強い印象を残している。のちに《L'Agneau 小羊 1954》に結晶するポジティブな人間像、M 流の〈聖人〉の原型は、こうしたところにあるものと想像される。

さて、《幸福》に表明された、この Du Bos 言うところの〈回心〉であるが、われわれはこれをどうとらえたらよいのであろうか。というのは、前にも言ったように M 自身この言葉を強く否定しているからである。M によれば、彼は信仰を「失った」ことは一度もない、だから〈回心〉することは不可能だ、という。これは《苦悩》と《幸福》の執筆時期とまったく重なり合って、同時平行的に進められた《Dieu et Mammon 神と黄金神》のなかで M が強調していることであり、彼の信仰上の問題がいわゆる〈改宗者〉の問題と質的に異な

るものであることは、Mが生涯を通じて、一種の苛立ちをともないつつ繰り返して主張しつづけた事柄である。Mauriac という一人の人間をとらえるとき、一つの争点ともなりうる重要な、かつ微妙な問題であって、早急に結論を出すことは避けなくてはならない。ただここでは、《幸福》にうつし出された心境についてMがのちに語っているところと、いま一つ Altermann 神父に対するMの複雑な感想をあげて、Gの指摘するMの〈曖昧性〉なるものが、この《幸福》に関しても完全に払拭しきれものではないこと、《苦悩》から《幸福》への転換が、大方向から声のかかるような〈受け〉を狙った鮮やかなものではなく、1928年以前も以後も、Mの〈苦悩〉に本質的な変化はなかったことを暗示するにとどめておきたい。

1931年《苦悩》と《幸福》がまとめて Grasset 社から出版されたとき、その前書きにMは次のように書いている：

この小著のうち《キリスト者の幸福》に関するページのみが、今日でも著者が自己の姿を認めている部分であり、かつ公表に際しても不安を感じなかった部分である。……

《キリスト者の幸福》は、それがわずか一日だけにすぎないとしても、安らぎを得た、一つの魂の驚嘆を表現したものである。……

つぎのような認識と確信こそ、すでに人生の曲り角に立つ者が情熱をこめて抱きしめるべき宝物である。すなわち高貴たることは可能だということ。そして高貴たることの発見は、おのれの悲惨を測り知るとき、ますます彼を驚嘆させる。……人の子にとって、絶望的とされる場合はない。神みずから卑しきものに下り給うとき、低劣すぎるものなどありえない。

(18)
おののく愛……

以上の抜粋から、少なくとも二つのことは読みとることができよう。恩寵に生きる喜び——それを得られないのではないかとの不安が《苦悩》の作者の胸を締めつけていたのだが——は確実に存在する。その確信を《幸福》の作者は

つかんだ。淵の底に沈む者にも光明は訪れるのである、と。さらにその喜びを味わったこともMは否定しない。〈回心〉という言葉が適当でないなら少なくとも〈堅信〉のわざはここに成し上げられたと見るべきであろう。

が、同時に「それはわずかに一日のことであった」との留保もついている。この留保は重大である。一方では、束の間とはいえこれは〈永遠〉につながる一瞬であることはまぎれもない。〈信仰〉はこの一瞬を他の暗黒の日々に立ちまざるものとする。だが一方で、この告白はMの沈んだ苦悩の淵が、その後も彼の踵をとらえ、何度か光明を見失わせたことを言外に匂わせているのである。

Altermann 神父に対しては、Mは後年政治上の見解から敵対するようになったこともあって、かなり批判的な言葉を洩らしている。もっとも Du Bos に対しては終始その友情と、キリスト教徒としての友愛に深い感謝を表わしており、また Altermann 神父がこの危機においてMにしてくれた援助にも決して謝意そのものを取り消すようなことはしないのであるけれども。

このときから四十年近い歳月を経て、Mは《新・内面の回想録 *Nouveaux Mémoires Intérieurs* 1965》の中で、Altermann 神父の肖像を次のように描き出している：

不屈のトマス主義者、今日の言い方で言えば完璧主義者、パリサイ人の末裔のパリサイ人——聖パウロがまさにそうであったような——メルキセデクの規範にのっとった司祭、旧約と新約の境界における *sacerdos magnus* (大司祭)。この人は、もはやじたばたすることもできないほど消耗しきって、頑丈な肩に担われ、身をまかせることしか求めない羊を救済するためにはうってつけの司祭だった。羊は、体力を取り戻すにつれて、我慢して背負われているのがやりきれなくなってくる。⁽¹⁹⁾

彼が御父のもとに帰ったいま、私は彼が正しかったことを認め、私が彼から受けた恩は彼がおかしたかもしれぬ過ちより限りなく大きなものであることを明言するものである……私が血を失って道端の溝にはまりこんで

いた人生の一時期、彼は私をその肩に担い、宿まで運んでくれた……私のそばにつき添い、片時も離れなかった。ソレームに連れて行き、マラガールに私を訪れ、ともにルールドに巡礼した。私はまるで彼に悔悟を導いて⁽²⁰⁾もらう唯一人の罪人であるかのように思いこむことができた……

そしてこれから三年後には、G-M往復書簡の編者 Jacqueline Morton 宛の手紙で、Mは次のように洩らしている：

彼にはあまりに多大の恩を蒙っているので、彼に関することに批判的な態度をとっては申し訳ないことになりましょう。しかしあえて言わせてもらえば、彼の性格にはとても堪えがたいところがあったのです。そして私の判断など当てにならないとしても、わが友シャルル・デュ・ボスの日記は、その指導司祭のために彼がどれほど不幸だったかを示しています。真実を言えば私たち——とりわけアルテルマン師は——当時霊的指導について⁽²¹⁾とんでもない思いちがいをしていたのです。

Jean Lacouture は、Altermann 神父の高圧的な人柄に反撥したのはMひとりではない、として、エチエンス・ジルソン、ガブリエル・マルセルらの名をあげている。自身改宗者であった Altermann は、恩寵に生まれ出ずる歓びを他者に伝えるのに性急でありすぎたようだ。しかし1928年当時のMは、彼自身の言葉を借りるなら「これ以上落ちこんだら死ぬしかない」状態にあった。《苦悩》に生半可な理解を示されるより、〈新しき人〉の確信にみちた強引さの方が快い場合もあろう。A神父が身をもって示したのは〈信仰〉であった。その火と燃える確信の態度と、名もない人びとの素朴な献身とが、Mに〈迷い〉を恥じ入らせたのも、頷けないことではない。Mは信仰を「捨てた」わけではなく、またA神父をはじめこのときMの身を氣遣った信ずる人びとは、決してMがはじめて出会った人びとではないのだ。これまでにも、というより物心ついた時からMを取り巻いて常に存在していた種類の人びと、いわば見知

り越しの間柄なのである。Mはボシュエの言を借りて、神は「一つの魂の内部にはいりこむための道筋はことごとく」知っている、と言っている。A神父がMに援助の手をさしのべたとき、この人物が神の〈勢力〉にすぎないことを誰よりもよく知っていたのはM自身である。そしてその〈勢力〉たちがかならずしも巧妙でなく、獲物である罪人の魂を狩人である神のほうへ追いたてようとして、かえって逆の方角へ追いやってしまうことを厳しく指摘してきたのも。

Mは Du Bos と会ったとき、すでに「選んで」いたのだと推察するのが恐らくは正しかろう。カトリック教会への〈復帰〉を、ではない。教会の門から「出て行かない」ことを、である。《苦悩》の終章は息遣いもなく、〈選択〉を迫っていた。Gの書簡も逆の方向からこれを迫るものだった。それに対する反応は、Mにおいてはかなりすみやかに行われたのではないか、という気がする。「自分は信仰を捨てたことはない、したがって回心もしない」というMの自己認識がすべてを物語る。ただ弱まったともしびを掻きたて、干からびた土地に水を引き、うなだれる首をおこせばよいのである。A神父がどのように独善的な人柄を示そうと、当時のMはそれを見てなどいなかった。目をつぶっても物の所在を確認できる、生れ育った家のなかを手探りで歩くように、Mは〈信仰〉のなかに光を求めて歩いた。頑丈な手がランプをつき出してくればそれでよかったのである。

そのことを、つまり1928年の危機の性格を、より詳細な形で証言するものが《*Dieu et Mammon* 神と黄金神》である。《苦悩》と《幸福》につづいては、全篇がG書簡への回答の形をなしているこの〈告白〉の検討を行わなくてはなるまい。

第十九書簡でMは、「いつか私の宗教的立場についての釈明をしなくてはなりませんまい」とGに書き送った。G書簡を受け取った五月から Du Bos に会うまでの七か月間——それはまさに《苦悩》執筆の時期であったが——Mは毎瞬間、己れに〈選択〉を迫った。深淵の底まで下りて行ったものには、いまひとつ別の深淵が姿を現わす、とMは《幸福》のなかに書いている——「それは⁽²²⁾もはやおまえが下降して行ったそれではない。——よじ登るべきそれである」。

七か月間……この問題の時期に、《*Dieu et Mammon* (以下 D et M と略す)》は生み落された。この自己検証の作業は翌1929年早々に Capitoile 社から限定出版される。Mが一般公開を拒んだためである。執筆中Mが夫人と母宛てに書いた手紙から、そのあたりの事情を知ることができる。

〔夫人宛〕私の仕事は《神と黄金神》です。安心して下さい。雑誌には載りませんし、限定された部数しか印刷されないでしょう。この仕事で私の宗教的立場を明確にすることを余儀なくされています。私は明哲であろうとつとめています。思ったより自分のはるかにキリスト教的な人間であることに気づいています。これが私の救いとなるでしょう。⁽²³⁾

〔母宛〕世に知られないこの著作の第二、第三、第四章ほど、心の暗闇に深く沈みこんだ私自身を描いたことはかつてありません。これほどの自分の姿には、どこにも出会わなかったのです。こうして、絶版となったほとんど知られない作品が突然、われわれ自身の生に関して、おそらくわれわれが書いたもののうちもっとも重要なものとなって現れてくるのです⁽²⁴⁾ね。

1958年になって、Grasset 社から再発行されたが、その際《*Souffrances et Bonheur du Chrétien*》、《*La vie et la mort d'un poète* ある詩人の生と死》《*Les Maisons Fugitives* 束の間の住み家》《*Hiver* 冬》といった自己告白的エッセエのいくつかが合本されている。この時書き添えた序文《*Un clef retrouvé* 見つけ出された鍵》の冒頭にMは1928年のG書簡をあげ、これに対する返事——手紙の形ではなく一冊の書物の形をとった返事が《D et M》に他ならないことを明らかにしている。G書簡は、1927年10月の第十六書簡とともに、本文中に全文が掲載される。全体が七章にわかれ、とくに母宛の手紙にも見られる第二、第三、第四章といった部分では、幼時にさかのぼってMの心の深奥を揺るがせていた葛藤が直視分析され、Gに触発されたこの自己糾明の

作業の《苦悩》におとらぬ苛酷なものであったことを十分にうかがわせる。

《D et M》の草稿は、二冊のノートの形で現在パリの Jacques Doucet 文学図書館に納められている。このノートを参照するなら、1928年におけるMの執筆状況が一目瞭然となる。七章に分れた《D et M》は章ごとの執筆時期がそれぞれに異っており、最終の第七章がまず最初に書かれ、第五章は講演用の草稿であったこともわかるはずである。

まことに幸運なことに、私は明治大学より在外研究を命じられて、この教養論集が刊行される春三月にはフランスに向けて出発の予定である。滞在中機会をとらえ、Mの手書きの、あの蟻のように細かい文字で書かれた《D et M》の草稿を、その作者の心から溢れ出た順序に従って読んでみるのが、いまの私の胸を暖めている。

《Gide-Mauriac 往復書簡について》と題するこの小論が書簡をはなれてさまよい出してからすでに久しい。せめて次稿では《D et M》の検討に引き続き閑話休題、1929年のG-Mのやりとり立ち戻るべく、努力したいと思う。

引用・参考文献

- ① François Mauriac: Œuvres Complètes, tome VII, pp. 225-276 《*Souffrances et Bonheur du Chrétien*》Paris Fayard 1952.
- ② Cahier d'André Gide 2: *Correspondance André Gide-François Mauriac* 1912-1950, établie, présentée et annotée par Jacqueline Morton, Paris, Gallimard, 1971.
- ③ *Chronologie* de F. Mauriac, établie par Jacques Petit. (1^{er} volume des Œuvres Complètes. Bibl. de la Pléiade, 1978.)
- ④ Jean Lacouture: *François Mauriac*, Paris Seuil, 1980.

註

- (1) 「明治大学教養論集」通巻182号 p. 60. 註(51)参照
- (2) 同 p. 60. 註(52)参照
- (3) ④—p. 237.
- (4) 《Charles Du Bos.....comprit qu'il ne fallait pas perdre un jour.....Il était dans tout le feu du retour à Dieu.....C'était Polyeucte au retour du

- temple où il s'apprête à renverser la statue de Gide.....En revanche, j'avais atteint mon étiage et, spirituellement, je ne pouvais plus baisser sans mourir.....» *Nouveaux Mémoires Intérieurs*, Flammarion, 1965. p. 227.
- (5) «Curieusement, cette conversion prit d'abord, comme un contrat d'éditeur ou une bonne affaire, la forme d'un repas au restaurant. Le 6 novembre 1928, un peu plus d'un mois après la publication de *Souffrances du Chrétien*, Charles Du Bos et François Mauriac prirent rendez-vous au Petit Durand, avenue Victor-Hugo, pour un entretien qu'ils estimèrent d'emblée décisif. ④—p. 238.
- (6) Charles Du Bos: «*François Mauriac et le problème du romancier catholique*» Paris, Editions Corrêa, 1933.—p. 67. «.....six semaines après la publication de *Souffrances du Chrétien*, la conversion de Mauriac était un fait accompli.»
- (7) L'homme accusait l'Auteur de la vie de ne pas faire sa part à la chair; et l'Auteur de la vie se venge en emportant cette âme et ce corps dans son amour, jusqu' à ce qu' il confesse que la loi de l'esprit est la loi même de la chair. ①—p. 252.
- (8) Lorsque le Christ affirme qu'Il est une nourriture et qu'Il est la vie, Il l'est, à la lettre, pour ton corps. ①—p. 252.
- (9)il existe un état physique de Grâce. ①—p. 253.
- (10) «Nous ne pouvons aimer que Celui qui nous a créés, —nous ne sommes aimés que par Celui qui nous a créés.....» ①—p. 254.
- (11) «plus que de l'amour, des vertus tructifiant dans l'amour.....» ①—p. 255.
- (12)même un janséniste n'approuverait pas ces notes.....que j'ai publiées sous le titre de *Souffrances du Chrétien*. ①—p. 251.
- (13)entre l'Agneau de Dieu et ta misère, il n'existe pas d'abîme que la Miséricorde ne comble. ①—p. 257.
- (14) Que cette distance entre vous ne te désespère pas: il fait toute la routeIl pénètre lui-même dans ce bouge de chair et de sang, s'assied à la table encore salie. ①—p. 263.
- (15) La marée de l'Esprit, en se retirant, laisse à découvert des systèmes désurnaturalisés où les intelligences tournent à vide, ①—p. 257.
- (16) 「明治大学教養論集」通巻160号 pp. 37—66. 《Gide-Mauriac 往復書簡について (Ⅲ)》参照
- (17) 「明治大学教養論集」通巻145号 pp. 43—44 参照
- (18) De ce petit livre, les pages sur le *Bonheur du Chrétien*. sont les seules

où l'auteur se reconnaisse aujourd'hui, les seuls qu'il eût publiées sans aucune inquiétude. ①—p. 225. *Bonheur du Chrétien* exprime l'émerveillement d'une âme en un seul jour pacifiée. ①—p. 226. C'est un trésor que l'homme, déjà au tournant de l'âge, serre passionnément contre son cœur, que cette connaissance, que cette certitude: l'ennoblissement est possible,.....Et la découverte qu'il en fait l'émerveille d'autant plus qu'il mesure mieux sa propre misère. ①—p. 227. Il n'existe pas, pour le Fils de l'homme, de cas désespéré; il n'est rien de trop bas lorsque Dieu s'abaisse. ①—p. 227. Un tremblant amour.....①—p. 227.

- (19) «Ce thomiste intraitable, le type même de ce qu'on appelle aujourd'hui intégriste, pharisien et fils de pharisien, comme fut saint Paul, prêtre selon l'ordre de Melchisédech, sacerdos magnus à la frontière des deux Testaments, était le prêtre le mieux fait pour secourir une brebis exténuée qui ne se débat plus, qui ne demande plus qu'à être prise sur des épaules robustes et à s'abandonner. A mesure que les forces lui reviendront, elle souffrira plus malaisément d'être portée.....» ④—p. 239.
- (20) «Maintenant qu'il est retourné au père, je lui rends justice et j'atteste que ce que je lui dois dépasse infiniment les torts qu'il a pu avoir.....A ce moment de ma vie où j'étais dans le fossé de la route, perdant le sang, il m'avait pris sur ses épaules, porté jusqu'à l'Auberge.....Il était demeuré près de moi, ne me quittant à aucun moment, il m'avait emmené à Solesmes; puis il me rejoignit à Malagar et fit avec moi le pèlerinage de Lourdes. Je pouvais me croire son seul pénitent.....④—p. 240.
- (21) «Je lui dois tant que je suis sans doute sans excuse de me montrer si critique en ce qui le concerne. Mais mon excuse c'est qu'il avait des traits de caractères difficilement supportables. Et même si je me défie de mon jugement, le journal de mon ami Charles Du Bos montre à quel point il a été malheureux par son directeur. La vérité, c'est que nous avions en ce temps-là—et surtout que l'abbé Altermann avait—de la direction une idée absurde.» ④—p. 241.
- (22) [Mais voici l'abîme infini:] non plus celui que tu descendais,—celui que tu graviras. ①—p. 256.
- (23) «Mon travail est *Dieu et Mammon*. Rassurez-vous, rien ne paraîtra en revue et ce ne sera qu'un tirage restreint. Le travail m'oblige à une mise au point de ma position religieuse. J'essaie d'être lucide. Je me trouve bien plus chrétien que je n'imaginai, Ce sera mon salut.»
- (24) «Je n'ai rien écrit sur moi-même qui s'enfonce aussi profond dans mes propres ténèbres que les chapitres II, III et IV de cet opusculé. Je ne

me suis nulle part découvert à ce degré. Ainsi un ouvrage épuisé et à peu près inconnu se révèle à nous soudain comme ce que nous avons peut-être écrit de plus important pour ce qui touche à notre propre histoire.» ④—p. 245.